

FAIRY TAIL～杖遣いの 魔導師の物語～

塩谷あれる

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

魔導士ギルド妖精の尻尾《フェアリーテイル》。フィオーレ王国はおろか、イシユガルで最もイカれた正規ギルド。そこに、「最強の杖使い」と呼ばれる魔導士がいた。顔はおろか姿も不明、どんな魔法を、杖を使うのかさえも、情報が不確定。しかしギルドの間は知っている。彼が、三十路過ぎのオッサンであることを――！

これは、最強の杖使い、クラウド・キャスターが、『至高の杖』を目指す物語。

目次

序章 ハルジオン

一人と一匹

料理店での会話

二人の少女

1

7

14

序章 ハルジオン

一人と一匹

広大な大陸、イシユガルにおける政治的中心組織である評議院、その本部E R A。ここでは今日もより良い魔法界を成形していくための会議が行われていた。

「ウルティアよ、会議中に遊ぶのはやめなさい」

ウルティアと呼ばれた黒髪の若い女性評議員が水晶遊びを窘められる。それに対しウルティアはクスリ、と笑い応えた。

「だってヒマなんですよ。ね？ジークレイン様」

「おーヒマだねえ。誰か問題でも起こしてくんねーかな」

ウルティアに賛同してジークレインと呼ばれた青い髪に刺青のこれまた若い男の評議員が茶化すように言った。その言葉に他の評議員は呆れ返り怒鳴る。

「つ…：憤みたまえ!!」

「全く、何でこんな若造共が評議員になれたんじや!!」

「魔力が高エからさ、じじい」

「ぬう～～～!!」

老評議員達が咎めれば、若い評議員達がヒラリと躲しおちよくる、そんな諍いがヒートアップしてきた所で、今まで黙っていた錫杖を持った評議員が窘めるように口を開いた。

「これ、双方黙らぬか。魔法界は常に問題が山積みなのじゃ、中でも早めに手を打ちたい問題は……」

フェアリーテイル
妖精の尻尾のバカ共じゃ」

天気は快晴、近所の少年少女にとつても、妖精達にとつても、絶好の悪戯日和である。

—————

フィオーレ王国ハルジオン、広い王国の中でも特に高名な漁業な海運業の盛んな街である。そんなハルジオンに、今、一人の男と、一匹の猫が降り立った。

「久々に来たなあ、ハルジオン」

『中々いい街だね』

片や薄い灰色の髪を無造作に分け、地味なダークブラウンのローブを羽織った三十路過ぎの男。片や橙色の毛に黄金の瞳を持つ可愛らしい何故か人語を話す猫。一見する

と不審過ぎた。まあ一見しなくても、猫が話している時点で不審だが。

「さて、お仕事しますかねえ」

『予測が正しければ標的はこのハルジオンに来るだろうからネ。さつさと捕獲して依頼金を頂コウ』

「相変わらず猫らしからねえなア。人間臭くなりやがつて」

『君がそう造つたんだヨ』

びよんこ、と猫は男の肩に乗り、それを確認した男は歩き出す。

『そう言えバ、今ここに火竜サラマンダーって呼ばれてる魔導士がいるみたいだケド、見に行くカイ

?』

「火竜サラマンダー、ねえ…どうも、アイツ以外思い浮かばんが…まア、んな訳ねえ、かあ?…何

か面倒事起こされて仕事に支障が出るのはダルいし、一応見に行くか」

そう言いながら、一人と一匹は歩いていった。

—————

「つたく、あの店主めーっ!」

魔導師の少女、ルーシイは憤慨していた。と、言うのも、目当ての品を安く手に入れるために色仕掛けをしたというのに、大して効果が無かつたためである。こんなピッチピチの若い女子の色仕掛けだというのに。

「あたしの色気は1000Jかーっ!!っって、ん？」

何やら騒がしいので見てみれば、人集りができている。しかも、聞こえてくるのは

『火竜』サラマンダーと
『火竜』サラマンダーと言う言葉だ。

『火竜』サラマンダーっってあの火竜!?!この街にいるの!?!」

火竜、それは、魔法屋では買うことのできない火の魔法を使うことができるという、

巷で噂のスゴ腕魔導師だ。どうやらあの人集りの中にいるらしい。

「へえ、やつぱりすごい人気ねえー…カッコいいのかしら」

ルーシイはミィハーだった。

「今んところは情報無し…か」

『まあ魔導師かどうかなんて一般の人には見た目じゃ分からないしネ』

「ホシの人は不明、使う魔法も明確には分かかってねえ…つたく、けつたいな依頼ぶち込んでくれやがる」

『選んだのはクラウトだロ?』

「仕方ねえだろ?金払いが良かったんだ。犯罪者の捕獲で15万J、受けねえ手は

ねえっつの」

『お金沢山ある癖にまだ欲しいノ?』

「お前のエサ代バカにならねえのわかってんのか、ミケ」

二人が駄弁つていると、ミケと呼ばれた橙の猫の耳がピン、と立つ。それを見たクラウトがミケに尋ねた。

「どうした」

『この道を通つ直ぐ行つた先、何やら人集りが出来てるみたいだネ。魔力の反応は二つ、もしかしたら今回の標的カモ』

「お、ようやつとか」

クラウトの顔に少し安堵の表情が見えた。何せ情報集めから何から、かれこれ一週間、はもうこの依頼に取り掛かっているからだ。

「おし、行つてみるぞミケ」

『分かつてるヨ』

――――
 (ちよ、ちよつと……あたしつてばどうしちゃつたのよつ!!)

ルーシイは困惑していた。何故ならかの魔導士、火竜サラマンダーから目線を離すことが出来なかつたからだ。おまけに何やら心臓がヤケにうるさい。顔が熱でも出したときのように熱い。目の前の男の周りをキラキラとした何かが舞っているように見える。明らかいつもの自分ではない。

(有名な魔導士だから? だからこんなにドキドキするの!!? これってもしかして、あたし…)

「ちよいと失礼するぜ、お嬢さん方」

ふらふらとルーシイが覚束ない足取りで^{サラマンダー}火竜の後を追おうとしたその直後、後ろから声をかけられ、肩が押しつけられた。と、同時に、ルーシイはどこか夢から覚めたときのような感覚に襲われた。別の例え方をするなら、そう、まるで、魔法が解けたかのような…とつさに後ろを見ると、そこには、灰色の髪の方が、肩に猫を乗せて立っていた。

「……キミは?」

「いやなに、俺の素性なんか聞いてくれなくても結構だよ。ただ一介の通りすがりのオジさんだからな。所で——」

^{サラマンダー}火竜が怪訝そうに尋ねる。すると灰髪の男はへらりと笑って応えた。しかし、その顔はどこか、獲物を見る獣のようだとルーシイは感じた。

「^{サラマンダー}火竜ってのあ、アンタかい?」

この出会い。この、灰髪の男、クラウト・キャスターとの出会いが、ルーシイの人生を大きく狂わせていくことを、今はまだ、誰も知らない。

料理店での会話

「……そうだ、と言ったら、どうなるんだい？」

サラマンダー 火竜は目の前の灰髪の男の登場に一瞬面食らったようだが、すぐに平静を取り戻し、キザつたらしい笑みを浮かべながら言った。それを聞いた灰髪は

「へえ……」

どこか品定めするかのように火竜サラマンダーを見た後、自分の肩の上で体を丸め寝る体勢になり始めている橙色の猫を伺った。

「おいミケ、こら、寝てんじやねえよお前」

『んん〜…んんニヤアア』

「こんな時ばつか猫みたいにしてんじやあねえぞ、おい」

何やつてんだコイツ。辺りの人々は皆そんなことを思っていた。いや、よく考えて欲しい。いきなり有名魔導士に今ありげに話しかけたと思ったら今度は猫に話しかける三十路過ぎのオツサン…はつきり言って痛い、痛すぎる。骨折ものの激痛である。何なんだこの男。と、辺りの空気が一気に冷めていく中、猫が口を開いた。

『全く…人の安眠を妨害しないでくれるカイ？デリカシーがないヨ、クラウト』

「「!!」」

「何言ってるんだバカネコ。工作中だったの。で、どうだ?」

『んく?んー…』

なんと、人語を話すはずがない猫がペラペラと流暢に人の言葉を話したのである。しかも、灰髪の男はそれがさも当然のように猫と対話している。男に尋ねられた猫は、チラリ、と火竜サラマンダーの方を見ると、あくびを一つしたあと眠そうな声で言った。

『干渉系の魔法の匂いがスル…多分この人がクロカナ…』

「よしきた。お兄さん、ちよいと一緒に来て貰おうか」

灰髪の男が火竜サラマンダーの肩を掴もうとした瞬間、二人(一人と一匹)はたちまち女達に囲まれた。

「ちよつとアンタ達失礼じゃない!?」

「そうよ!!火竜サラマンダー様はすごい魔導士なのよ!!」

「クロとか何とか、いきなり何してんのよ!!」

「おつ、うお!?!ちよ、ちよいと待てお嬢さん方」

たちまち囲まれ袋だたきにされる二人。それを火竜サラマンダーが止めた。

「まあまあ、その辺にしておきたまえ。彼らにも何か理由があつてこんなことを言ったのかも知れないしね」

「さ、火竜サラマンダー様が仰るなら…」

「やさしく♡」

「あ〜ん♡」

火竜サラマンダーの言葉ですぐに殴るのをやめる。その姿を見て、ルーシイは何かを確信したかのように火竜サラマンダーを睨み付けた。

「君達の厚い歓迎には感謝するけど…僕はこの先の港に用があるんだ、失礼するよ」

火竜サラマンダーがパチン、と指を鳴らすと、地面から炎が溢れ出る。火竜サラマンダーはその炎に乗り、何やらパーティーをやる旨を伝えた後、どこかへ行ってしまった。

「…クソ、取り逃がした。追えるか？ミケ」

『君が追尾機能はつけなかったんだロ』

「ああ、そうだったな。仕方ねえ、急いで港に…」

「あの、ちよつと良いかな」

男が立ち上がり、猫がその肩にまたびよんと乗り、駆け出そうとする。それを遮るよ
うに、一つ声が上がった。二人が振り向くと、そこには

「さつきはありがとね」

「『?』」

一人の少女が立っていた。

「いやあ、良い人だな。お前さん」

『そうだね』

「いいのいいの、気にしないで。さっきは助けて貰ったし」

クラウトとミケは、先程話しかけられた少女、ルーシイに連れられ食事をしていた。

「あの火竜サラマンダーつて男、魅了チキムつて魔法を使つてたの」

「ああ、らしいな」

『発売禁止になったはずだケド…裏ルートか何かで手にしたのカナ?』

二人の言葉を聞き、ルーシイは確信した。彼らもまた、魔導士なのである、ということ。
とを。

「ねえ、アンタ達、何でアイツを追つてたの?」

「ん? ああ、依頼でな」

『犯罪者の捕獲のお仕事中なんダ』

「犯罪…アイツ、犯罪者だったの!?!」

ミケの言葉を聞き、ルーシイは思わず立ち上がった。周囲から好奇の目で見られたため一応座り直したが、その驚きは冷めていない。

「ああ。マジモンの犯罪者だ。ここ最近、街々で若い女が消えてく事件が連続して起

こつてな。その消えた女の中に、とある名家のお嬢様がいた。その名家の旦那さんが、お嬢様の搜索、及び下手人の捕獲をギルドに依頼したつてわけだ」

『一夜にして女達が消えたことカラ魔導士の犯行であることが分かツテ、そこから使用魔法は人の意志や肉体を操る干涉、操作系の魔法である線が高いつてことデ調べテタ所だつたんだ』

「んでもつてさつきサラマンダーの火竜を、ミケお得意の魔力解析で嗅いでもらったところ、見事にビンゴ、つて所だ」

「……………」

ルーシイは困惑していた。まさか、あの男が犯罪者だつたとは。

「つてか、だとしたらあの男追わなくて良いの!？」

「ああ。それは良いんだよ」

「ど、どうして…」

「よくよく考えりや、あの野郎は今夜船上パーティーとやらをする予定なんだ。恐らくその船で女達を攫つてくつつもりなんだろうよ。だとすりや、その港さえ抑えときや捕まえられる。もし仲間がいりや、それこそ一網打尽だ。その船に件のお嬢様がいるかどうかは分からんが、何にせよそのタイミングでお嬢様の居場所を聞き出せる」

よっこいせ、と年寄りじみた声を上げてクラウトが立ち上がり、それを見たミケは

ひよい、とまたも彼の肩に飛び乗った。

「ごちそーさん。俺の分のお代はここに置いておくれ。あ、釣り銭があつたら貰つて良うまい」

『おいしかったヨ』

「え？ いやちよつと、お礼なんだから奢らせてよ！」

「若いお嬢さんがお気になさんな。お礼なら、良い店を教えてくださいましたので十分だ。次ハルジオンに来るのが楽しみになった。もしそれでも礼がしたいってんなら……」

クラウトはポケットからメモ帳とペンを取り出し、サラサラと何かを書いた後、そのペー지를破つてルーシイに渡した。

「これ、俺の入つてる魔導士ギルドの住所アドレスな。もしなんか困つたことがあつたら、直接ここに訪ねて、『クラウト・キヤスターの紹介で来た』って言えば格安で仕事してやるよ。俺に仕事くれるって意味で、これでおあいこつてことにしてくれや」

そう言つてクラウトはひらひらと手を振つて店を出て行——こうとしたところで止まり、ルーシイに振り返つた。

「ああ、そうだ。さっきの男、分かつてると思うが気をつけておけよ。理解している以上、もう魅了チャームは効かん。だが、奴さんがまだ何かを隠している可能性は考慮しておけ。間違つても近づくんじゃあない」

そう言い残して、クラウトとミケは今度こそ店を出たのであった。

二人の少女

「はあ…なんかもう、色々疲れちゃった…」

その後、店を出たルーシイは、その道で魔法専門誌『週刊ソーサラ』を買ってへたりとベンチに座り込んだ。無理も無い。この数十分の中で色々と驚くことが多すぎた。

「まーた妖精の尻尾が問題起こしたの？今度は何？デボン盗賊一家壊滅するも、民家7軒も壊滅…あははっ！やりすぎ!!」

ペラ、ペラと雑誌をめくっていくと、またも妖精の尻尾についての記事があった。

「あ、これ…妖精の隠者の記事だ」

妖精の隠者とは、妖精の尻尾の中でも時折話題に上がる魔導士で、依頼成功率96.3%を誇るスゴ腕の魔導士だ。顔はおろか身体的な特徴も不明で、分かっていることと言えば、杖を使う魔導士であることくらいだろうか。しかし、その杖を使って戦う様から、「大陸最強の杖使い」とも噂されている。

「妖精の隠者、悪徳魔導士大量拘束、またもや素顔拝めず…かあ。んくくっ！やつぱは最高にかっこいいなあ！魔導士ギルド妖精の尻尾!!」

「へえー…君、妖精の尻尾に入りたんだ…」

「!!」

突如後ろから声をかけられ、身構えるルーシイ。そしてそれは、正解だったと言えるだろう。何せその声の主は、先程クラウトが話題に出し、気をつけろと言っていた男だったのだから。

「サ……火竜!!?」

「いや、探したよ……君のような美しい女性を是非我が船上パーティーに招待したくてね」

「ここ、来ないでー!」

ルーシイは咄嗟に腰の鞭を取り出した。

「おいおい、別にそんな風に身構えなくたって良いじゃないか。ただ僕は君をパーティーに誘おうとしただけだよ?」

「とぼけないで! あたし、知ってるんだから! アンタが魅了チャームを使って女の子を次々攫さらつてること!」

キツ、と火竜を睨み付けるルーシイ。それを見て、火竜は一瞬驚いたように目を見開いたが、すぐにまたキザつたらしい笑みを浮かべる。

「おやおや……どうやら君は、知ってはいけなことを知ってしまったみたいだねエ。どこでそれを知ったのかは知らないが、いけない子だ……」

「そう言う」と火竜サラマンダーは、左中指にはめた指輪に触れた。カチリ、と言う音がどこからともなく聞こえる。と、その直後、ルーシイの体に異変が起きた。

「ぐっ…何、これ…」

「秘密を知られたからにはただじゃあおかないよ、お嬢ちゃん。君には少し眠って貰う」

あまりにも強烈な眠気。全身に鉛のように重い何かのしかかり、思考がたちまち鈍っていく。最早、立っていることも覚束ない。

(ダメ…寝たら、あだし、も…)

必死の抵抗も虚しく、ルーシイはその場に倒れ込んでしまった。それを見て火竜サラマンダーは先程のキザったらしい笑みから、ゲスの臭いを漂わせるいやらしい笑みへと表情を変えらる。

「ククク…見れば見るほど上玉だ…魅了チャームに気づいてたつてことは魔導士で違いねえだろうし…あハア〜！コイツア高く売れそうだ」

火竜サラマンダーはルーシイを担ぎ上げ、炎を呼び出して、港の方へと飛んでいった。

—————

「…う、う〜ん…あつ!!こ、ここは?」

暗い部屋の中でルーシイは目を覚ました。自分の体を確認すると、どうやら手足を縛られていることがわかる。鍵は回収されていないようだが、これでは身動きは出来なさそうだ。

「ハハ、どハ…？」

「船の上よ。あのクソツタレ魔導士の、ね」

「え？」

突然聞こえた声に振り向くルーシイ。するとそこには、控えめながらも高価そうな服に身を包んだ、ルーシイと大して年齢も変わらなそうな少女がいた。後ろ手で手を縛られており、ルーシイよりは体の自由度は高そうだが、ドアを開けることすらできない状況では、逃げることは難しそうだ。

「貴方、は？」

「私はリーゼ。あのクソツタレに騙された女よ…貴方と同じ…では、無いかもしれないけどね」

リーゼと名乗った少女は、どこか皮肉めいた笑みを浮かべて言った。その顔には、皮肉の他にも、諦めの感情も見える。

「あのクソツタレはこの船を使ってボスコとかカエルムとか…そこら辺の隣国に攫った人達を奴隷として売り捌いてるみたい」

「奴隷…なら、なんで貴方はここに？」

「わからない…って言いたいところだけど、思い当たる節はあるわ。まあ私、こう見えてもちよつと名のある家の娘なのよ」

ホントにちよつとだけどね、とリーゼは呟き、それから続けた。

「もしあのクソツタレが私を利用しようとしてるんなら、多分お父様にでも掛け合つて身代金でも頂こうつて算段なんじやないかしら。それか、自分のやつてることの隠蔽を手伝わせてるか…まあ、どちらにせよロクでもないけどね」

リーゼの話を聞いて、ルーシイは先程のクラウトとの会話を思い出していた。先程彼は、確かに言っていたのだ。とある名家の当主が、娘の搜索、及び犯人の捕獲をギルドに依頼した、と。

（そっか…この子が、クラウトが言つてた『名家のお嬢さん』なんだ）

そこまで考え、ルーシイはある一つのこと気がついた。

（そう…そうだ！よくよく考えたら、クラウトの仕事は『火竜犯人の捕獲』…クラウトは船上パーティーが行われるこの船がある港を抑えて捕まえるつて言つてたし、もしかしたら何とかなるかも！）

船上パーティーは夜に行われる。恐らく彼も、そのタイミングで仕事を始めるだろう。

(夜まで耐えれば、助けが来る——！)

希望があることを理解したこと、若干心に余裕ができたルーシイであった。

時は過ぎて、まだ涼やかな風の吹く夜。フィオーレ全体を見ても広大な面積を持つハルジオンの港と、そこを根城とする数々の船。その中でも一際目立つ客船に、多くの若い娘達が群がっていた。その中心には、どこかで見たような薄っぺらでキザったらしい笑みを浮かべた魔導士がいる。

「よし、アレで間違いはなさそうだな…さっさと仕事を終わらせるか」

『ねえねえクラウト』

「なんだよミケ、どうかしたのか？腹減ったんだつたら後にしろよ」

そんな船と人集りを、そのそばの船の陰から見ていたクラウトとミケだったが、急にミケがその形の良い耳をピン、と立ててクラウトに話しかけた。

『ボクは腹ペこキヤラじゃないヨ！じゃなくテ、さっきあの船の周りの魔力反応を聴いたんだケド、どうやらあの魔導士の他にも…んー、二つ、カナ？とにかく魔力の反応があつたヨ。気をつけた方が良いカモ』

「二つか…魔力のデカさはどうだ？使う魔法の性質…は範囲外だから無理だが、そつちはわかるだろう？」

『片っぱは、そうだね。昼間のあの女の子位の、平均を下回る位の魔力カナ。もう片方は更に小つちやいな。市販のちよつと高めの魔道具と同じ位』

「んー、ま、それ位なら大丈夫だアな」

そんな、まるでこれから遊びに行く友人同士のような気の軽さで話し合う一人と一匹。その表情に、凡そ緊張、怯え、そんなものは微塵も見えなかった。

「じゃ、そういう訳だ。行くぞミケ。戦闘お仕事のお時間だ」

『オツケークラウト。いつも通り行コウ』

クラウトは、自分の頭をすっぽり包むようにローブのフードを被り直す。その途端、二人の姿は跡形もなく消え、ただ少しばかりの風が流れていくだけだった。